

# 解脱上人と明恵上人

—『高山寺明恵上人行状』に描かれる解脱上人—

野村卓美

## 一 はじめに

解脱房貞慶（一一五五—一二二三。以下、引用以外では「貞慶」と記す）と明恵房高弁（一一七三—一二三二。以下、引用以外では「明恵」と記す）が交友関係にあつたことは知られているが、その実態については余り検討されてきていないようである。その最大の原因は、両者の関係を確認する資料が殆ど明恵側のそれに限られていることにあるのではなからうか。南都の僧侶や貞慶が著した資料から、明恵、もしくは両者に関する記述を見出すことは、現在のところ困難な状況にある。本稿も多くを明恵側の資料を参照しながら、両者の関係を考察していくことになる。

以下、両者の交遊を確認し、貞慶が明恵に関心を抱い

た経緯と、その時期について検討してみたい。

## 二 貞慶と明恵の交友関係

両者の直接の交遊に関しては、例えば、「伝記系諸本の中でも最も古い時代の書写本」である<sup>①</sup>とされる興福寺蔵『梅尾明恵上人伝』上に、「<sup>②</sup>置解脱上人常御座法談有ケリ」（29才）、「或時上人被仰、笠置解脱上人来臨法談次語云」（34ウ）とあり、貞慶が高山寺を頻繁に訪れていたと記されている<sup>③</sup>。しかし、それらをそのまま信じることは出来ないのではなからうか。

両者の交遊を確認出来る資料は、現時点では二点が紹介されているにすぎない。

一つは、「二十七廻の春」、即ち、明恵の十七回忌の宝

治二年（二二四八）に弟子高信が編纂した和歌集『明恵上人集』に、

解脫上人の御もとへ花嚴善知識のまむだらかき  
ておくりたてまつり給ひけるついでに

一一二 善知識かきたてまつるしるしには解脫の門  
にいらむとぞおもふ

返

一一三 善知識あきらけき恵のひかりをぞまことの  
道のしるべとはせむ

という贈答歌である。これは明恵晩年の弟子高信が「もとめうるにしたがひて私に記しくは」えたものであり、贈答の時期は未詳である。しかし、『漢文行状』巻中には、「図絵善知識曼荼羅」とあり、詞書にある如く、仏師俊賀が「花嚴善知識のまむだら」を描いたことが確認出来る。また、「其銘云、建仁元年十一月初、奉図写善財善知識唐本」（4張）云々とあり、建仁元年（二二〇二）十一月に明恵がそれに銘を記している。とすると、明恵が貞慶に同曼荼羅と歌を贈ったのは、その頃と考えるべきではなからうか。この贈答からは両者の深い信頼関係

が読み取れ、交遊はこれ以前から始まっていたことを推察させる。

両者の対面を記す唯一の資料が、渡竺を計画した明恵を春日明神が留めた経緯を詳述した喜海編『明恵上人神現伝記』（以下、『神現伝記』と略記）である。それによると、建仁三年正月廿六日から湯浅宗光（「上人舅」（『仮名行状』上・76オ）の妻室に春日明神が憑依し、同廿九日に降託があった。その中に、明恵の計画には賛同出来ず、都の近くに住むことを勧め、

然、籠居条我等ウケサルナリ、解脫御房不思議哀  
人候、其籠居条我等ウケス候ナリ、カク申御物語候  
へし、

（5張）

\*傍線は稿者。以下、同。

と、明恵と貞慶の「籠居条我等ウケ」ないと、両者を並べて語っている。託宣の後に、奈良に向かい、翌二月廿七日に「解脫上人対面タメニ笠置寺參」（16張）とあり、両者が対談したことを明示する、信頼出来る唯一の文献である。

宗光妻室の発言の中で波線部は、この直後に明恵と貞慶が会う予定であることを、彼女が承知していたことを示している。何故、彼女は、そのような事柄を知ることが出来たのであろうか。その背景を考察するために、正治・建仁年間の明恵の行動、明恵と明神が憑依した宗光妻室との関係を知る必要がある。

### 三 正治・建仁年間の明恵の行動

明恵が建久六年（一一九五）廿三歳の時から、後鳥羽院の院宣により高山寺に落ち着く建永元年（一二〇六）三十四歳の間、紀州湯浅を中心に遍歴を続けなければならなかった政治的な背景等については、山田昭全氏に詳細な論稿がある。<sup>5)</sup>ここでは託宣がなされた直前の正治・建仁年間の明恵の行動を中心に、山田氏が言及されていない資料も参照しながら、明恵が湯浅、即ち、妻室の近くで過ごしていたことを確認してみたい。

『仮名行状』上によると、建久九年秋末に「高尾聊騷動事風聞」（75ウ）して、白上峰に移住するも騒音に悩

まされ、紀州湯浅「石垣奥」「筏立云処」の「一両草菴」（76オ）に遷住している。それは宗光が用意してくれたものであった。同十月八日には釈迦像の前で「唯心観行修行始、并大願文誦」（76ウ）している。<sup>6)</sup>続いて、「喜海給仕」彼修行軌儀マナムテ（77オ）とあり、『仮名行状』・『神現伝記』等、明恵伝記に関する作品を多く遺した喜海（一一七八〜一二五〇）は、これ以前から師弟関係にあったと考えられる。<sup>7)</sup>翌春（正治元年）、高尾で『探玄記』第三卷以下を談ずるが、「文覚上人」勅勘ヨテ、「又筏立草菴栖」（77ウ）んでいる。以上で、『仮名行状』上は終わっている。周知の如く、『仮名行状』中は散佚しており、『漢文行状』巻中で補われる。それは建仁元年から始まっており、正治年間の明恵の行動は記されていない。その期間を、『高山寺経藏典籍文書目録』<sup>8)</sup>を参照して補ってみたい。

同目録からは、正治年間（一一九九〜一二〇一）に明恵や同朋が書写・校合・加点した典籍を見出すことが出来る。正治元年九月五日（高山寺聖教類（以下、略）第四部一一九函18）から同年十月廿四日（同一一九函10

(10) (12) まで『探玄記』を校合・加点している。<sup>(9)</sup> 同二年も筏立にいた。二月十五日には「末資永真」が『不動護摩次第』(第二部137)に墨書し、閏二月廿四日には、『聖如意輪觀自在菩薩念誦次第』(第四部七六函92)が何人かによって書写されている。共に筏立で記されており、明恵の意に従ってなされたのであろう。三月十九日(同八函27)から廿三日(同一〇九函3)の間は『華嚴經』の書写・加点が同所で行われている。喜海(同一二函8)と明恵(同一〇九函2)も書写している。また、『皇帝降誕日於麟德殿講大方仏華嚴玄義』を「華嚴和尚末流英敏法師(生年廿歳)」が九月十二日に「紀州有田郡石垣ノ之莊」(同一七二函23)で、同廿二日に「華嚴宗頭印法師」が「紀州在田群糸野」で「俱舍論」巻第十九(同一四一函2(16))を書写している。これも明恵の命に従っての行為と推察される。この年も、筏立・糸野と時折り、住所は変更しているが、故郷湯浅で修学していたと推察される。

『漢文行状』巻中は、建仁元年から始まる。同年二月に『華嚴唯心義』<sup>(10)</sup>を著し、「其後(宗光糸野館内成道寺)後、

結兩三草菴ヲ召請之、仍移住彼所、」(1張)云々とあり、宗光の招請により、筏立から糸野に移住している。先述した、善知識曼荼羅の作成も同所で行われた。「其後兩三年間、住彼糸野菴室、勸十余輩衆一励一宗学業、」とある。そして、同二年には、糸野の草庵で上覚から灌頂を受けている(6張)。違乱の影響を受けて保田星尾に移住はしているが、紀州湯浅に住み、宗光の保護を受け続けていた。

上述した如く、明恵は建久九年廿六歳の秋から建仁三年三十一歳の間、舅宗光の庇護のもと、幾つか草庵は替わったが、紀州湯浅を中心に修行していたことがわかる。『漢文行状』巻中には宗光妻室に関する記述が存している。それによると、「此妻室往年十二三歳之比、親見靈物、自尔以来常煩邪氣、」于今不平愈、」(1張)と、靈感のある女性であった。また、「建仁之比殊以更發(于時懷妊間也)」(2張)と懷妊中に毘舍遮鬼類が憑き、明恵が加持すると、その過程で奇瑞が生じている。また、

然間夫妻共起大願、書写華嚴一宗章疏、又彼妻室投資具調度、図繪善知識曼荼羅、

(4張)

と、夫妻共に明恵の信奉者でもあり、先述した善知識曼荼羅は妻室の支援を受けていた。

このように、明恵は建久九年秋から、託宣があり貞慶と対面するために奈良に赴くまで、五年近く湯浅で宗光の庇護を受けて修行しており、妻室とも非常に親しい関係にあった。彼女に対しても、明恵は自らの行動計画を

「恒語」〔神現伝記〕(一オ) いたであろう。故に、彼女は明恵が貞慶に対面に行く計画を熟知していたと考えられる。前章で波線を付した「カク申御物語候へシ」と、貞慶への伝言を語った背景には、このような前提があったのである。

このように、湯浅を中心に行動していた明恵と、笠置に隠棲していた貞慶とは、どの様にして対面することが出来たのであろうか。

#### 四 行状系に描かれる貞慶

明恵伝記の中では行状系が「根本資料としての資格を充分備へてゐる」(補注(2))とされており、明恵の行

動・思想を知る文献として重んじられている。その行状系に貞慶の名前は一度、下巻・承久二年(一二二〇)の記事の中に見出せるのみである。そこから、貞慶が明恵を意識した時期と、その経緯を推察することが出来るのではなからうか。以下、その記事を「仮名行状」下(21オウ24ウ)から引用し、検討してみたい。

I 同(承久)二年(庚辰)ノコロ、殊蟄居<sup>シテ</sup>花巖<sup>ニ</sup>経ヨテ結業禪誦<sup>ス</sup>、

II 都<sup>ヲ</sup>弱年<sup>ノ</sup>昔、身<sup>ニ</sup>仏法<sup>ニ</sup>宿ヨリ以來タ、志操嚴清ニシテ花俗<sup>ニ</sup>同セス、仏意ノ淵底<sup>ヲ</sup>ウカ、ヒ、入道ノ要路<sup>ヲ</sup>コ、ロサス、コレヨテ十八九歳<sup>ノ</sup>比ヨリ、習学<sup>ヲ</sup>ノイトマノ隙<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>禪門<sup>ニ</sup>カケ、大小乗ノ教門<sup>ヨ</sup>テ禪觀<sup>ノ</sup>方軌<sup>ヲ</sup>尋ネトムラフ、然<sup>レ</sup>明恵<sup>ノ</sup>輩<sup>ハ</sup>八国<sup>ニ</sup>ミチテ踵<sup>ヲ</sup>繼ケリトイヘトモ、定学<sup>ノ</sup>好人<sup>世</sup>マレナリ、行解<sup>ノ</sup>知識<sup>ステ</sup>ニカケテ、證道<sup>ノ</sup>入門<sup>ヲ</sup>抛失<sup>ヘリ</sup>、仍<sup>レ</sup>宿善<sup>ニ</sup>偏説<sup>力</sup>憑<sup>テ</sup>、恒<sup>ニ</sup>五門<sup>ノ</sup>禪要<sup>ニ</sup>并達磨多羅經<sup>等</sup>開、閑静<sup>ノ</sup>処<sup>ニ</sup>シテ坐禪<sup>思惟</sup>、又<sup>レ</sup>禪法<sup>要解</sup>一部自筆<sup>ヲ</sup>モテ書写<sup>シテ</sup>、コレヲ開<sup>テ</sup>心<sup>ヲ</sup>養フ、

III 正治三年正月廿四日に『五門禪經要用法』・『阿

蘭若習禪法」等を参照して、「盛明修定入聖方法」を行つてゐると、「如宝珠」き「有一灯光」といふ奇瑞が生じたことを、或書に記した。

#### IV

其後学大少窺、教。実アキラムルニ随。其禪觀用心コレヲタツネモトム、然レトモイマタ思得トコロナシ、或時彼花嚴ノ道英法師、起信花嚴ヨテ結業禪誦スト云々、其ノ迹ヲタツネテ、一時起信論ノ真如生滅ノ二門、随流返流ノ教門ヨテ、真如觀修セシカハ、傍ノ人夢月輪任<sup>（註リ）</sup>七八尺許シテ、上人ノ上映照セルヲ見事アリ、

#### V

或時仏道ノ入門、般若二空ノ妙理ナリ、コレニアラスハ大乘ノ大行立セサラム、コレヨテ三論宗旨檢、空觀无生ノ妙理思攝、笠置解脱上人、此事聞テ悦云ク、我仏法ヲイテ其至要サクル、般若真空ノ妙理、仏道ノ肝要ナリト思フ、恐レナカラ我安立スルトコロ、ハルカニ符合<sup>スル</sup>コト不思議ナリ云々

#### VI

或又円覚經三觀廿五論ノ方軌ヨテ、円覚性觀<sup>スルニ</sup>、其好相ウルコトアリ、上注スカコトシ、或花嚴

六地、十二因縁、唯識唯心、并三无差別妙理、法界縁起ノ円觀ヲイテ、行立コ、ロヲ瑩トイエ

トモ、未タソノ方軌イタサス、

#### VII

然<sup>ルニ</sup>、永久二年ノ比、惣<sup>シテハ</sup>、花嚴一經、大宗、香象清涼ノ雅意マカセ、別<sup>シテハ</sup>、通玄三部論旨本トシテ、坐禪ノ次第第一卷ヲ出シ、并人解脱門義一部二卷コレヲ撰<sup>ス</sup>、

先ず、VIIの「永久二年」といふ年号について検討してみたい。永久二年（一一一四）は明恵が生まれる以前の年号であり、転写される過程での誤写と推察される。『漢文行狀』上山本（10張）・報恩院本（17ウ）の如く、「承久二年」とすべきであろう。このことは、「坐禪ノ次第一卷」である『仏光觀略次第』（『華嚴一乘十信位中開廓心境仏道同仏光觀法門』）と『華嚴修禪觀照入解脱門義』を著したのが同年であることから首肯される。とする<sup>と</sup>、引用した記事は、Iの承久二年に『華嚴經』を参照して結業禪誦した結果、VIIの二作品を著したことを語つており、II〜IVは青年期の明恵が禪觀を修してきた経緯を語り、Vはその過程で貞慶は、明恵が禪を取り入れて

修行しているとの情報を聞き感嘆したことを記している。VIはその後も様々な修行を試みるも、その「方軌」を確立することが出来なかつたことを語っている。

上述した如く、行状系の作品は信頼すべき伝記とされているが、記述されている事柄を幾つか確認してみたい。

先ず、IIの十八・九歳の建久元・二年頃から「禪門」に関心をもち「禪觀」方軌」を尋ね、常に曇摩蜜多訳『五門禪經要用法』・仏陀跋陀羅訳『達磨多羅禪經』を参照して修行し、『禪法要解』（鳩摩羅什訳『坐禪三昧經』か）を書写したとする記事から確認してみたい。行状系の十八・九歳の記述からは禪に関する事柄は見出せない。しかし、明恵は『華嚴仏光三昧冥感伝』<sup>②</sup>（以下、『冥感伝』と略記）に、承久二年のこととして、

同十月許、從喜海法師之許「送一二帖双紙」是愚僧生年十八九歳之比、抄出少々經論文「双紙也。其中抄出五門禪經要用法文、一枚余紙、紛失後、經廿許年」故不知此双紙所在、并文等「披其禪經文」上所「得境界、一々以符合。」（五ウ）

と記している。廿年前に抄出した『五門禪經要用法』の

双紙を喜海が見出し送ってきたが、それらは当時の明恵の考えと合致していたとある。喜海はこのことを参照してIIの記事を著したのであろうか。

また、『仮名行状』には、出家した記事に続いて、紀州に下向した折りに、藤代王子で「癩病人」を見て「或人」が「人肉癩病、良薬ナリ」と語つたことを思い出し実践しようとした逸話が記されている（上・19オ）。これは『五門禪經要用法』（『正藏』十五・三二七頁中）に見出せ、釈迦が太子であった時の説話を踏まえており、出家直後から披見していた經典であったことがわかる。また、十八・九歳の時から禪に関する典籍を書写していたことは、現存する高山寺聖教類からも窺うことができる。例えば、『無畏三藏禪要』の奥書には、

建久元年玖月八日於紀州在田／郡崎山住処書了／同  
交点了／永真本（第四部一四九函39）  
とあり、また、『禪法要解』巻下の奥書には、

建久二年五月十九日午時許／於神護寺書寫了／成弁  
／一投了（同一三六函20〔2〕）

とある。この奥書は行状系の「白筆」モチ書写シテ、コレ

ヲ開テ心養フ」という記述の正確さを示すものの一つである。

Ⅲの「或書」を特定することは出来ないが、宝珠が出現するという奇瑞を明恵は幾つか記録している。管見に及んだものを二三示してみる。『冥感伝』冒頭には仏光三昧を修している、承久二年七月廿九日に「右方有如火聚」光明「（一ウ）とある。高山寺蔵『夢記』承久二年八月七日「初夜」の「禪中」に「宝珠」が現れている（第十篇）。また、伯爵松浦厚氏所蔵『明恵上人夢記』には翌四年正月五日に「禪中前有如火光」として図示し、下に「如此、其形又如宝珠炎也」と注記を加えている（『大日本史料』第五編之七 補遺）。このように、宝珠の出現は禪（仏光三昧）との関係が緊密なようである。

Ⅳでは、明恵が『華嚴経伝記』釈道英（『正蔵』五一・一六二頁中〜下）の記述を規範として修行したことが語られる。明恵が青年期に「仏道修行ノコトハリヲオシフルニ人ナシ」（『仮名行状』上・20才）という状況で、祖師伝等に記された修行方法を模倣して修行していたことは論じたところである。柴崎氏の調査によると、花園

大学今津文庫には建久六年五月五日の奥書を有する『華嚴経伝記』が現存しており、それは明恵が何人かに書写させ、自筆で奥書を加えたものである（補注（14））。同伝記や高僧伝は、廿歳代前半の明恵が修行方法を模倣している折りに見出した実践書であった。故に、道英のことは建久年間紀州荊藻嶋で修行した際にも、道英法師の事跡を「遊観」し、『宋高僧伝』元曉伝の記述にも「唯心無性智ミカクノミ非、又世間遊宴友シテ心遊 情催、」（『仮名行状』上・63才）とある。

上述してきた如く、Ⅱ〜Ⅳに記されている明恵に関する幾つかの事柄は、他の資料類からも確認することが出来る。史実に基づいて喜海が記述していることがわかる。とすると、Ⅴの貞慶が明恵の禅観を中心とした修行方法を聞き、「我安立スルトコロ、ハルカニ符合スル コト不思議ナリ」と語ったことも史実とすべきではなからうか。

行状系の記述によると、貞慶が明恵を意識した「此事」とは、直接は「三論ヲ宗旨ヲ檢、空観无生ノ妙理ヲ思攝、」を指すのであろうが、先にも記されている、明恵が十八・九歳の頃から『五門禅経要用法』等の經典、『華嚴



経伝記』に記された祖師の修行方法、「般若二空ノ妙理」・「三論宗旨」等を参照して、「禅観」方軌尋トムラ」つているとの情報を「聞」たと解すべきであろう。その時期に貞慶も同様のことを「安立」<sup>16</sup>しており、明恵の修行方法に強い関心を示したのである。<sup>17</sup>

この記事から、貞慶が明恵を意識した時期を明確にすることは出来ないが、奇瑞を書き記したことも聞いたとすると、貞慶四十七歳、明恵廿九歳の正治三年（建仁元年）頃と考えるべきではなからうか。

## 五 貞慶・明恵の禅観と交友関係

上述した如く、最も信頼出来る行状系に拠ると、貞慶が明恵に関心を抱いた直接の契機が「禅」であった。明恵・貞慶と禅に関しては、先学の指摘があり、それらを幾つか概観してみたい。

周知の如く、青年期からの禅に対する明恵の修学は、「見出新渡通玄論中上所引」仏光観文<sup>18</sup>（『冥感伝』）とあり、李通玄との出会いにより、仏光三昧観として大成

する。その経緯については、先に引用した『仮名行状』下の承久二年の記述等を参照しながら、大屋徳城・鳥地大等・柴崎照和（補注（14））氏等により詳細に論じられている。船岡誠氏は、

明恵にとっての禅門とは、禅宗などでは決してなく、あくまで禅定門を意味した。戒定慧三学の堅持、これが明恵の基本的立場であった。

と、簡潔に明恵と禅との関係を説明している。<sup>20</sup>

法相宗と禅宗をはじめとする他宗との関係について積極的に言及しているのは貞慶の法孫良遍であり、研究の多くは良遍について論じられている。貞慶と禅についての研究史は西村玲氏が略述している。鳥地大等氏は「直接禅の影響」は否定するが、法相宗の教学の「絶対否定の空観」を強調したとする（補注（19））。勝又俊教氏は貞慶の著述の中に「禅宗の考え方ときわめて類似した考え方」<sup>21</sup>が存することを指摘し、鎌田茂雄氏は「当時の時代思潮」である「禅や浄土の影響を強く受けた」とする。山崎慶輝氏は貞慶は「華嚴を通して中国の禅を学んだかのも知れない」とし、太田久紀氏も「当時の禅宗の動き

が貞慶の心を触発した面のあること」を指摘する<sup>25</sup>。唯識観の実践で、禪宗の影響を受けたとされる貞慶であるが、西村氏は「自分は観行を完成させた訳ではなく、必ずしも観行に堪えられる訳でもないという自覚を、彼は最後に持っていた。」(補注(21))と、貞慶と禪観との関係を強調し過ぎることを戒めている。富村孝文氏も貞慶と禪について論じている。<sup>26</sup>氏は、貞慶の著述で禪に言及している箇所を精査し、「釈迦在世時代の仏教のように、正しい仏教を實踐すること、すなわち戒・定の修行に励んだ」とし、何故に禪を学んだかについては、「法相宗が禪定、なかならず唯識観の重視を説くから」と説明する。

貞慶が、明恵の修行方法から、自らが抱いているのと同様な危機意識を感じ取ったことが、両者を対面へと発展させたのではなからうか。では、貞慶は「此事聞テ」とあり、明恵が禪を取り入れた修行方法を模索していることを、何人から聞いたのであるか。建久三年頃に興福寺から笠置寺に移住した貞慶に情報を伝えたのは、修行期から明恵と交遊があった人物であろう。現在、資料

からは二人の人物、藤原長房(一一七〇〜一二四三)と藤原盛実(一一六〇〜一二二六)を想定することが出来る。以下、その理由を略述してみたい。

まず、長房(慈心房覚真)について検討してみたい。<sup>27</sup>長房と貞慶の直接的な関係を語る最初の資料は海住山寺蔵・貞慶自筆の「貞慶仏舍利安置状」<sup>28</sup>であろう。承元二年(一二〇八)九月七日に後鳥羽院から託された仏舍利を、九日に「御使長房」が海住山寺に届けている。それ以前の両者の関係は未詳である。しかし、長房は貞慶を師として、同四年九月廿二日に同寺で出家しており(「尊卑分脈」)、両者には早くから信頼関係が存していたと推察される。

一方、長房と明恵の関係は、黒田彰子氏が上寛著『和歌色葉』の奥書を検討する中で詳述している。<sup>29</sup>氏は以下の如く推察する。上寛の父、明恵の祖父である湯浅宗重と長房の伯父藤原(吉田)経房とに親交があったことは、その日記『吉記』から知ることが出来る。承安四年九月廿日には「湯浅宗重法師来、自去比在京云々」とあり、また、同廿五日には熊野参詣の途中で「昏黒着湯浅入道

堂」とある。また、『和歌色葉』の中に建久六年正月の経房家歌合と推察される記事が見出せることから、「上覚と経房が相知る関係にあった可能性」と「長房が経房を通して早くに上覚をしつていた」と推察出来ることを指摘している。建久九年には長房が後鳥羽院へ『和歌色葉』の献上を仲介しており、両者の直接の関係が確認出来る。これが長房・明恵の「交渉の端緒」となったが、それは「より直截に明恵個人につながる性格のもの」であつたとする。

長房と明恵の交遊を示す資料で、最も遡ることが出来るのは、『明恵上人集』五四番歌の詞書であろう。それによると、承元二年春に華嚴宗興隆のための院宣があり、心待ちにしているも実施されないので、翌三年七月廿二日に「民部卿長房のもとへたづねつかは」したとある。この頃には、直接和歌の贈答をするほどの関係にあつたことがわかる。次に、注意すべきは明恵が承元四年七月に著し、長房に書き与えた『金師子章光顯鈔』二巻である。同鈔の序には「予不<sub>レ</sub> 応<sub>レ</sub> 請送<sub>一</sub> 一兩年。遂至<sub>一</sub> 承元四年夏<sub>一</sub> 重有<sub>一</sub> 慇懃請<sub>一</sub>」とあり、また、『漢文行状』

巻中にも、

其年（承元四年）民部卿長房卿熊野詣下向之時、於<sub>レ</sub> 白方宿所<sub>一</sub> 上人対面之次、花嚴金師子章、注釈、重有<sub>一</sub> 懇望<sub>一</sub> 之趣<sub>一</sub>（年来毎<sub>レ</sub> 面謁<sub>一</sub> 之次<sub>一</sub> 求請<sub>一</sub> 之<sub>一</sub> 然而<sub>一</sub> 空送<sub>一</sub> 年序<sub>一</sub> 畢<sub>一</sub>、）（32張）

とあり、明恵が『金師子章』の注釈書を長房に書き与えるまでには、依頼を受けて数年が経過していたことがわかる。少なくとも、承元元年以前から両者の交遊が存していたと推察される。このような長房が明恵の情報を貞慶にもたらした可能性を推察することは出来ないであろうか。

次に、藤原盛実について検討してみたい。盛実については五味文彦<sup>(1)</sup>・井上一稔<sup>(2)</sup>氏の詳細な調査・報告がある。稿者も幾度か論じたことがある。以下、盛実と貞慶・明恵の関係を略述する。五味氏は『春日権現験記絵』巻十五に登場する「丹波入道浄恵」は盛実であり、「最勝講問答記」により貞慶の弟子（孫弟子）良遍は盛実息であることを明らかにした。稿者は正治元年（一一九九）制作の京都峰定寺藏釈迦如来像（以下、「峰定寺像」と

略記) 納入品に、「施主丹波入道」・「施主丹波入道帰阿」等とある人物も盛実とした。また、『統伝灯広録』巻第七 賢海付法に「定意(俗名丹波守)盛実後(出家)」等とあるも、同一人物とすることを留保していたが、井上氏の指摘により再調査を行い氏の推察の正しさを確認することが出来た。

このように盛実を調査してみると、貞慶に明恵の情報をもたらした可能性が出てくる。先述した如く、丹波入道盛実は「峰定寺像」の施主である。同像に貞慶は『解深密経』を書写・納入している。<sup>34)</sup>このことから、貞慶と盛実は師弟関係にあったと考えられる。また、定意の名前が記された伯爵松浦厚氏所蔵文書『明恵上人夢記』(『大日本史料』第五編之七)がある。既に指摘したことではある(補注(33)二〇〇八年)が、建仁三年十一月廿九日の夢に、「淨恵房(定意、丹波入道)が現れており、房号や注記から論じている盛実と判断される。続けて、明恵は「冷泉三位舎弟也」・「三位殿者は相人也、依之此御房モ被為此事也」と盛実周辺の情報も記しており、早い時期から両者に交遊が存していたと考えられる。

上述したような、長房・盛実のように、貞慶・明恵と交遊があった人物が、明恵の情報を貞慶にもたらしたとすべきであろう。信頼出来る資料に拠るかぎり、両者が直接対面したことを示すものは、先に引用した『神現伝記』の一度のみである。伝記系が記す如く、両者が頻繁に行き来したことはないようである。しかし、貞慶歿後も海住山寺と高山寺には人的交流があった。<sup>35)</sup>

## 六 おわりに

貞慶が明恵を知った経緯について、『仮名行状』下の記事を中心に検討してきた。両者を結びつけたのは「恵学ノ輩ハ国ミチテ踵ケリトイヘトモ、定学(好人世マレナリ)という、当時の仏教界が抱えていた危機意識であった。それを克服する方法の一つとして両者は、余り顧みられることのなかった禪を取り入れ、その修行方法を模索した。明恵は文治四年(一一八八)には東大寺戒壇院で舅上覚について出家し、同寺尊勝院聖詮から華嚴学を学んでいる(『仮名行状』上・15才)。また、建久二年は

「生年十九歳、就興然阿闍梨<sup>テ</sup>」(「漢文行状」卷上・10張)と厳しい修行中であつた。貞慶は翌三年に笠置寺に隠遁しており、共に、東大寺・興福寺と近い寺院で過ごした期間が存したが、その頃は互いに意識することはなかつたであらう。

そのような二人を結びつけたのは、行状系によると、明恵が禅観に工夫を加えて修行しているとの情報を、貞慶が入手した正治三年(建仁元年)頃と推察される。当時、明恵は紀州湯浅を中心に同朋と修行をしていた。明恵の修行の様を貞慶に伝えたのは何人であらうか。資料から推察出来る人物としては、例えば、藤原長房や藤原盛実のように、両者と交遊関係にあつた人物の介在が考えられる。盛実は正治元年造像の「峰定寺像」の施主であり、貞慶も同像に結縁しており、明恵が貞慶を尋ねた後ではあるが、建仁三年十一月廿九日の夢に盛実が登場しており、両者を結びつけた可能性が高い人物として注目される。

先述した如く、『神現伝記』によると、両者が笠置寺で直接会つたのは建仁三年二月廿七日であり、貞慶が明

恵のことを聞いた二年後と推察される。両者対面の記事は行状系には見出すことが出来ない。あるいは、両者が直接対面したのは『神現伝記』が記す一度のみであつたのではなからうか。

伝記系は年長者である貞慶が頻繁に明恵を訪ねたとするが、貞慶の年齢やその後の多忙な活動<sup>(36)</sup>を考えると、これは後人が添加したこととすべきであらう。しかし、明恵も幾度か貞慶の教義や行動に言及しており、書簡の遣り取りや同朋等の往復は頻繁になされていたのである。それらの事柄については稿を改めて論じてみたい。

#### 補注

(一) 貞慶と明恵の説話について論じたものには、浅野祥子「明恵上人と貞慶上人―説話の混淆、個性の問題等について―」『明恵讃仰』第十八号(一九八七年十月)、筒井早苗「春日明神と貞慶・明恵」『説話文学研究』第三十四号(二〇〇〇年七月)等。また、野村「解脱上人と明恵上人―太郎・次郎説話」と「春日大明神御託宣記」―『別府大学短期大学部紀要』第二十九

号(二〇一〇年三月)でも考察を試みた。

(2) 奥田勲『明恵上人資料 第一』(高山寺資料叢書

第一冊。東京大学出版会。一九七一年)「解説」。

現在、明恵伝記文献に関しては、奥田氏の「解説」が最も詳細である。それによると、「行状系の『高山寺明恵上人行状』(『仮名行状』・『漢文行状』)は「根本的な資料として重視され」るべきものであり、伝記系の興福寺蔵『梅尾明恵上人伝』等は「明かに後代の増補と思はれる箇所が多く見え」とする。

本稿では、主に行状系は施無畏寺蔵『仮名行状』から引用し、上山本・報恩院本『漢文行状』を参照する。なお、『漢文行状』は注記なき場合は上山本を用いる。明恵伝記類の引用は、全て『明恵上人資料 第一』から行う。

(3) 明恵が貞慶を尋ねる説話は、山崎淳氏の紹介する貞慶伝記の一つである『解脱記』に、明恵が笠置寺を訪ねるも同寺の華美な様子に失望し貞慶に会わずに帰った、とある(笠置寺蔵『解脱記』(解脱上人伝―翻刻と解題―)『小野随心院所蔵の文献・図像調査

を基盤とする相関的・総合的研究とその展開』(科  
学研究費補助金 基盤研究(B) 研究報告書(平成18  
年度)。二〇〇七年二月)。

(4) 吉原シケ子著『明恵上人歌集の研究』(桜楓社。  
一九七六年)・奥田勲著『明恵―遍歴と夢―』(東京大  
学出版会。一九七八年)も、贈答の時期を俊賀が建仁  
元年に描いた「善知識曼荼羅」との関係で論じている  
が、奥田氏は「この前後」とするが、吉原氏は、後述  
する同三年二月「二十七日解脱上人に対面のために笠  
置寺に赴いた。この時のことであろうか。」とする。

(5) 山田「明恵の釈尊思慕とその背景」『豊山学報』第  
三号(一九五六年十一月)。

(6) 『随意別願文』奥書にも同様のことが記され、「於  
紀州林中筏師草庵」とある。「筏立」は「筏師」(他  
の文献には「筏地」とも記されていたのであろう。(田  
中久夫「建久九年の明恵上人」『金沢文庫研究』第  
二六一号(一九八〇年一月)、後、著書『鎌倉仏教雑考』  
(思文閣出版。一九八二年)再録)。

(7) 田中久夫「義林房喜海の生涯」『南都仏教』第

三十四号（一九七五年七月）、後、補注（6）の著書、再録。

(8) 高山寺資料叢書 第三冊・第五冊・第八冊・第十冊（東  
京大学出版会。一九七三〜八一年）。典籍番号も同書。

(9) 『明恵上人手鏡』には「探玄記之三」に「正治  
二年三月五日」（第四部一六四函一（第六面））とあり、  
『探玄記』の修学は二月頃から始められたのであろうか。  
また、多くの奥書には、「上人御本奥書云／正治  
元年九月五日午時於紀州在田郡石垣庄筏師之／草菴与  
一両学徒読之次科点切了」（同一一九函18）や、石垣  
筏立の草庵で、「以東大寺尊勝院経藏之本」（同 10  
（8））の如く、東大寺尊勝院の典籍を参照して校合し  
たことが記されている。

(10) 奥書には「建仁元年二月廿一日」「糸野之前丘衛尉  
藤原ノ宗光」<sup>ノ</sup>「家居」とある（『高山寺典籍文書の研究』  
（高山寺資料叢書 別巻。東京大学出版会。一九八〇年）  
「翻字篇」）。

(11) 『華嚴入法界頓證毘盧遮那字輪瑜伽念誦次第』（第  
一部234）の奥書には「建仁二年十月一日於紀州糸野山

中子尅計明恵房阿闍梨御房伝受了」とある。これは上  
覚の灌頂と関わりがあるのではなからうか。

(12) 冒頭には「秘宝蔵一章也。依憚他見」後日分爲別記。」  
とあり、『華嚴仏光三昧観秘宝蔵』（承久三年十一月九  
日成立）の一部であったことがわかる。なお、『冥感伝』  
の引用は『明恵上人資料 第四』（高山寺資料叢書  
第十八冊。東京大学出版会。一九九八年）。

(13) 野村「明恵上人伝記の研究―出典文献に近似する  
明恵の行動とその表現―」『日本文学』第五十二巻第  
二号（二〇〇三年二月）。

(14) 柴崎照和著『明恵上人思想の研究』（大蔵出版。  
二〇〇三年）によると、明恵自筆本が花園大学今津文  
庫に蔵されている。

(15) 道英説話については、野村「明恵における説話受容」  
『日本文学』第二十六巻第十二号（一九七七年十二月）。  
後、拙著『明恵上人の研究』（和泉書院。二〇〇二年）  
再録）でも論じた。

柴崎氏も、明恵と『華嚴経伝記』の関係については  
詳述しており、その中で、順高が『五教章類集』上

でも道英説話に言及していることを指摘している(補注(14))。

(16) 明恵が「安立」という語を用いて自らの和歌を説明していることは、山田昭全氏が詳述している(「明恵の和歌と仏教」『国語と国文学』第五十巻第四号(一九七三年四月)。貞慶も著述に「安立」を用いている。

(17) 『溪風拾葉集』巻第七十九には、

一。明恵上人行法次第事 師語云。彼上人者、

寂靜之時、毎日三座也。総愆(念念カ)之時、毎日十二座被<sub>レ</sub>修云々 解脱上人亦復如<sub>レ</sub>是云々

(『正蔵』七六・七六四頁下)

とあり、明恵と貞慶の「三摩地」の行法が同じであったと光宗が師説を記している。両者の禅観の行法が近似していたとの説が存していたと推察される。

(18) 大屋著「禅宗綱目の出現と其の思想上の背景——中世に於ける華嚴と禅の関係、特に高弁の思想に就いて——」『日本仏教史の研究三』(東方文献刊行会。

一九二八年)。

(19) 島地著「日本仏教教学史」(明治書院。一九三三年)。

(20) 船岡「明恵の禅定思想」『院政期の仏教』(吉川弘文館。一九九八年)。

(21) 西村「中世における法相の禅受容——貞慶から良遍へ、日本唯識の跳躍——」『日本思想史研究』(東北大学)第三十一号(一九九九年三月)。

(22) 勝又「鎌倉時代における唯識観の実践——貞慶の唯識観——」『印度学仏教学研究』第十五巻第二号(一九六七年三月)。

(23) 鎌田「南都教学の思想史的意義」『南都仏教』(日本思想大系。岩波書店。一九七一年)。

(24) 山崎「法相唯識の改革者貞慶」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第十七集(一九七八年九月)。

(25) 太田「鎌倉時代の唯識」『金沢文庫研究』第二七一号(一九八三年九月)。

(26) 富村「解脱上人貞慶の禅定について——特に唯識観の実修について——」『琉大史学』第十一号(一九八〇年十月)。

(27) 奥田勲「明恵と慈心房覚真」『国語学論集』(小林



芳規博士退官記念。汲古書院。一九九二年）に詳細な年譜がある。

(28) 佐脇貞明「海住山寺文書」『史学雑誌』第七十編第二号（一九六一年二月）。

(29) 黒田「和歌色葉奥書再読―上覚と長房兄弟―」『国語国文』第六十五卷第二号（一九九六年二月）、後、著書『中世和歌論攷―和歌と説話と―』（和泉書院。一九九七年）再録。

(30) 著者・成立年等は未詳であるが、『明慧上人法語』には「民部卿長傍」は明恵と対面した時、明恵が深く西天を慕っている様に感嘆し、釈迦仏の背景に靈鷲山を描かせて奉納した。「長傍其後笠置ノ上人ニ対シテ。此由レヲ語り玉ヒケレハ。」とあり、そのことを貞慶に語っている。この長傍は長房の誤写であろう。

(31) 五味著『絵巻を読む歩く』『春日験記絵』と中世』(淡交社。一九八九年)。

(32) 井上「釈迦如来像」(峰定寺)『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇一(解説)』(中央公論美術出版。二〇〇三年)。なお、納入品の翻刻は全て、

同論文から引用。

(33) 野村「『春日権現験記絵』と丹波入道」『国語国文』第六十九卷第九号（二〇〇〇年九月）、同「春日権現験記絵」と詞書の成立―藤原俊盛説話を中心に―『国語国文』第七十卷第十一号（二〇〇一年十一月）、後、共に拙著『中世仏教説話論考』（和泉書院。二〇〇五年）再録。また、野村「貞慶をめぐる二人の僧侶―虚空と定意―」『文藝論叢』第七十一号（二〇〇八年九月）でも論じた。

最近、盛実が書写したと推察される經典の存在を知った。以下、略述してみる。

貞慶十三回忌の元仁二年（一二二五）二月三日に、生前貞慶が入手し、海住山寺に安置していた一切経で欠巻があったものが補写・奉納された。それらは同寺には現存しなく、京都興聖寺に移されている。その中の、『諸経要集』卷第十三（整理番号 四五八一―三）奥書には、

以上階経藏本一交了、元仁貳年正月奉為来月三日御遠忌（十三年）所被書儲之御経内、手跡

雖散々只志行也、但写経之間、暫時発心及度々、  
以此心善奉廻向御得□

導師高弁上人

仏子覚澄

三帰弟子定意

(田邊三郎助「釈迦如来像」『日本彫刻史基礎資

料集成 鎌倉時代 造像銘記編 第四卷(解

説) (中央公論美術出版、二〇〇六年)

とある。西山厚氏は「定意は薬師寺僧ではないか」「貞慶の十三回忌と一切経」「興聖寺一切経調査報告書」(京都府古文書調査報告書 第十三集、一九九八年)。先の、「諸経要集」奥書も同書から引用)とするが、この定意も盛実ではなからうか。当時、盛実は六十四歳であり、「拭老眼下筆了」という記述と矛盾しない。晩年まで貞慶を深く信頼していたことがわかる。

(34) 野村「解脱房貞慶と『解深密経』——峰定寺釈迦如来像納入の貞慶著「解深密経及び結縁文」を巡って——」『別府大学国語国文学』第四十九号(二〇〇七年十二月)で翻刻した。

(35) 東大寺蔵釈迦如来像には、

嘉禄元年(乙酉)十月十六日、於海住山寺造始  
之。同十一月二日造畢。

仏師善円(持八斎戒)

同二年(丙戌)九月廿二日於梅尾供養

とあり、貞慶没後、仏師善円によつて海住山寺で造られた釈迦如来像は、同寺の覚澄が母親の極楽往生を願つて造らせたものであるが、その供養は明恵が導師をつとめている。両寺僧侶の交遊が貞慶没後も行われていたことがわかる。

(36) 貞慶晩年の行動は、藤岡穰「解脱房貞慶と興福寺の鎌倉復興」『学叢』(京都国立博物館)第二十四号(二〇〇二年五月)の論文と「解脱房貞慶年譜」に詳述されている。

\*引用は次の典籍から行った。

『明恵上人集』(新編 国歌大観(角川書店)。版本

『梅尾明恵上人伝記』(岩波文庫、一九八一年)。「梅

尾説戒会日記」(『明恵上人資料第三』(高山寺資料

叢書 第十六冊)。『吉記』(增補 史料大成。臨川書店)。「金師子章光顯鈔」(『日本大藏經』華嚴宗章疏上)。「春日權現驗記繪」(『春日權現驗記繪 注解』(和泉書院。二〇〇五年)。「続伝灯広録」(続真言宗全書)。「明慧上人法語」(『日本大藏經』華嚴宗章疏下)。

(二〇一〇・一・廿八)